



# 鎮守の森だより

NPO 法人 社叢学会ニュース

第 18 号

2005 年 11 月 14 日

## 平成 18 年度総会は太宰府天満宮で

平成 18 年 5 月 27 日 平成 18 年 3 月 25 日

## 臨時総会を伏見稻荷大社で

平成 18 年度の総会並びに研究発表・シンポジウムは、平成 18 年 5 月 27 日に福岡県太宰府市に鎮座する太宰府天満宮で開催することが決定しました。総会当日のスケジュールは、午前中に総会と会員の研究発表を行ない、午後からシンポジウム(基調講演・パネルディスカッション)、夕刻に懇親会を催します。詳細は追ってご連絡致しますが、去る 10 月 16 日にわが国 4 番目の国立博物館として開館した「九州国立博物館」は、天満宮境内よりエスカレーターとトンネル(動く歩道)で繋がっておりますので、総会と関連したエクスカージョンも検討中です。

因みに、九州国立博物館は他の 3 つの国立博物館が美術系博物館であるのに対して、歴史系博物館として設立されました。特に「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える博物館」を基本理念に、旧石器時代から近世末期(開国)までの貴重な歴史資料を展示しています。

平成 18 年 3 月 25 日の伏見稻荷大社における臨時総会は、当学会の現役員の任期満了・改選による役員変更(新任・再任・退任)について、会員(正

会員)の皆さまに討議・承認いただく総会です。この日は特別講演も予定しておりますので、正会員に限らず、市民会員の方々のご参加もお待ちしております。

### 研究発表者募集

テーマ 社叢に関する理論的研究  
社叢の保存・拡充に関する実践的調査研究

発表時間 20 分(報告 15 分 + 討論 5 分)

応募締切 平成 18 年 2 月末日必着

応募者は住所・氏名・職業を明記の上、発表内容を 300 字 ~ 400 字にまとめて事務局(京都)にご送付下さい。

応募者多数の場合は研究発表審査委員会で審査し、3 月末までに採択通知を致します。

採択が決定し、大会当日に配布する資料は 4 月末までに事務局にご送付下さい。

## 照葉樹林の語源と照葉樹林の種多様性

講 師 服部 保 (兵庫県立大学教授・社叢学会理事)  
 コメンテーター 武田 義明 (神戸大学助教授)

**照葉樹林の語源** 照葉樹林を常緑広葉樹林、暖温帯林、亜熱帯林、さらにはローレル林と呼ぶ研究者がいる。英名では、subtropical rain forest、evergreen broad-leaved forest、Warm temperate rain forest など様々な用語が用いられている。照葉樹林という用語の語源は、1912 年にドイツのブロックマン・イエロスとリーベルが世界の植生の体系を報告したのに始まる。彼らは、熱帯雨林でもなく硬葉樹林(オリーブのような葉をもった樹木)でもないカナリア諸島、日本などの常緑広葉樹林を「Laurilignosa」と命名した。これを正確に訳すと「ローレル(月桂樹)林」となるが、1930 年に東京大学の中野治房教授は自著で「照葉樹林」と訳した。中野教授はシイ・カシ・タブ林の構成種の多くが、硬葉樹にはないテケテカと光るクチクラ層の発達した葉を持つことに注目して「照葉樹林」と意識したと考えられる。1953 年には今西錦司・吉良竜夫両氏が照葉樹林という和名は用語として適切であるとして、それを英訳した「lucidophyllous (lucidophyll) forest」を英名として提案している。因みに、照葉樹林文化という言葉がよく使われているが、これは東アジアの照葉樹林に限定されたかたちでの文化論である。

**照葉樹林の定義** 常緑広葉樹林の一種で、ツバキ・カシ・クス・シイなどのように光沢のある葉をもち、樹高は 20m ~ 25m、熱帯雨林ほどではないが着生植物・寄生植物・腐生植物がそこそこ出てくる林。分布地域は東アジア、熱帯山岳地帯、カナリア諸島、チリー、ニュージーランド、フロリダ半島など。日本では東北地方沿岸部以南の低山から低地で、タブ・カシ・シイなどが主な樹林であるが、大面積で残存するのは宮崎県綾町、鹿児島県栗野岳、対馬のタテラ(竜良)山、屋久島、西表島などで、ほとんどが破壊され里山化している。こうした状況で、社寺の森には照葉樹林が孤立状に残っている。

**照葉樹林構成種** 照葉樹林の高木層・亜高木

層・低木層を構成する常緑の広葉樹が骨格となり、さらに照葉樹林帯に生育する草本植物・着生植物・寄生植物・腐生植物・つる植物を加えて照葉樹林構成種と呼ぶ。沖縄から青森までの照葉樹林を調査した結果、1,008 種の照葉樹林構成種が見つかった。この構成種を分類すると、照葉樹林の骨格を構成する照葉樹(高木・小高木・低木)の合計は約 280 種と意外に少なく、これに対してシダ類は 316 種、ラン類は 167 種、その他の草本類は 165 種で、照葉樹林構成種の中で草本類、特にシダ類が多いことがわかる。着生・寄生・腐生といった特殊な生活形の植物も 170 種と多く、照葉樹林の種組成を特徴づける要素の一つとなっている。環境省の絶滅危惧種によると、照葉樹林構成種 1,008 種のうち 321 種が絶滅に瀕しており、絶滅危惧の割合は 32%となっている。国内全体の植物の絶滅危惧種の割合が 25%なので、照葉樹林構成種はより危機的状況にあるといえる。

**照葉樹林の種多様性** 種多様性の要因には、気温・面積・海拔・潮風・地形・地質・ギャップなどがあるが、特に気温と種数の相関は非常に高く、最寒月の平均気温が高い地域ほど種数も多い。面積は広いほど種数が多くなる。社寺林における面積との関係を調べてみると、約 200 m<sup>2</sup>の社叢で 18 種くらい、約 1,000 m<sup>2</sup>で 20 ~ 30 種、約 1 ha で 50 ~ 60 種となっている。海拔との関係は、海拔が 1 m 上がると 0.6 度ずつ気温が下がるので低海拔が好ましく、地形的には斜面下部、潮風の影響のない内陸部ということになる。ギャップは台風等により林冠木が倒壊し、周辺の植物を巻き込んでできた林冠の穴のことで、照葉樹林にはこのギャップ相、回復段階の建設相、さらに老齡樹より構成される成熟相の混在し、モザイク状の群落複合体となっている。ギャップ相の意義は林冠木の更新の場であると同時に、陽地生植物の種多様性の維持の場であるばかりでなく、照葉樹林構成種の多様性維持に大きな役割を果たしている。

### 次回予告(第 18 回関西定例研究会)

日 時: 2005 年 11 月 26 日(土) 13:30 ~ 15:30

場 所: 伏見稻荷大社儀式殿(京都市伏見区深草藪之内町 68 075-641-7331)

テーマ: 歴史的な緑の現状と保全活用のあり方

講 師: 上南木 昭春(大阪府立大学農学生命科学研究科教授・社叢学会理事)

コメンテーター: 角野 幸博(武庫川大学教授)

## 古代の社叢・寺林・墓林

講師 和田 萃 (京都教育大学教授・社叢学会監事)  
コメンター 井上 満郎 (京都産業大学教授・社叢学会理事)

**水辺の祭祀** 近年、水辺の祭祀遺跡が各地で数多く発見されている。これは、古来失われた社叢を考えるうえで、非常に重要な史料となる。発掘調査史料にみえる水辺の祭祀を分類すると、自然の湧水(泉)や人口の井戸(井)でおこなった井泉祭祀、水分や小川、川の上流、川原・河辺、人口の溝・大溝などでおこなった水辺の祭祀に大別できる。さらに、祭祀者を大王(天皇)、大和王権、豪族首長、律令国家(神祇官)、律令国家(国司・郡司)、地域共同体に分類している。これらの遺跡で現在もなお神祭祀が行われているものがある。例えば、静岡県引佐(いなさ)町にある天白磐座遺跡。引佐町を流れる宮川の辺に式内社謂伊神社(彦根藩主井伊家の総氏神)が鎮座し、その裏のこんもりした低山(森の丘)に天白磐座遺跡が立地している。遺跡からは壺や祭祀関係遺物が出土し、古墳～鎌倉時代を中心に祭祀が営まれた遺跡であることが明らかになった。水辺の祭祀遺跡が最初に注目されるようになったのは三重県上野市の城之越遺跡で、その後、古墳時代の大規模な水辺祭祀遺跡が発見され、水辺を利用した祭祀の様子が明らかになりつつある。

最近、水辺の祭祀遺構を模した埴輪が出土し注目されている。兵庫県加古川市の行者塚古墳、大阪府藤井寺市の狼塚古墳、三重県松阪市の宝塚1号墳などから出土した罎型埴輪からも、古代の水辺の祭祀の様子を探ることができる。大阪府八尾市のしおんじ(心合寺)山古墳からは「水辺の祭祀場を表した埴輪」が出土している。この埴輪は、罎型・家型・導水施設が一体化した極めて貴重なものである。また、宝塚1号墳出土の埴輪は湧水施設を表す非常に優れた埴輪である。

『常陸国風土記』行方郡の条に「郡(こおり)の東に国つ社(やしろ)あり。此を懸(あがた)の祇(かみ)と號(なづ)く。社(もり)の中に寒泉(しみづ)あり。大井と謂ふ。郡に縁れる男女、会集(つど)ひて汲み飲めり」とある。ここでいう「社」を連想させるのが三重県上野市の城之越遺跡で、大小の岩石を配した祭祀場は水を流せる施設として構築されており、水を媒体とした祭祀がおこなわれたと考えられる。また、三重県の六大A遺跡では自然の岩盤の間から水がしみ出ており、それを小さな井戸を掘って磐井(石井)とし、ここで祭祀をおこなっている。遺跡からは井戸をはじめ竪穴住居、掘立柱建物などの遺構とともに、土器や須恵器などの遺物が多数出土し、東海地方でも最大規模の祭祀場として有名である。

これら水辺の祭祀遺跡は、かつて存在した社叢として、また、天白磐座遺跡のように現代まで社叢が続いているものがある。

**檀林と山居** 古くから寺院や仏教の学問所を檀林というが、寺院の境内にある林を檀林ともいっている。平安朝などかつて大伽藍を擁した寺院には、樹林といったようなものはなかったようだ。中世の五山などには檀林・樹林はでてくる。

『僧尼令』禅行条に「凡そ僧尼、禅行修道有りて、意に寂に静ならむことを楽(ねが)ひ、俗に交らずして、山居を求めて服餌(神仙の術として不死の薬を服用すること)せむと欲はば、三綱連署せよ。在京は、僧綱、玄蕃に経(ふ)れよ。在外は、三綱、国郡に経れよ」と、僧尼が本寺を離れて山居する時の届出の手續等を規定している。山居とは山林で修行することで、例えば月の前半は吉野などの山林で修行し、月の後半は寺に戻り修行するなど、かなり古くから山居は行われていた。服餌は道教的なもので、「僧尼令」そのものが中国の「道僧格」を藍本としてつくられたものである。また、『令義解』僧尼令の条に「山居、金(かね)の嶺(みたけ)に在る者は、」とあり、平安初期には金の嶺(吉野の金峯山寺蔵王堂付近)で修行する僧がいたことがわかる。宇佐八幡宮の弥勒寺のように、早くから神仏習合の進展したところでは神社の境内に仏堂が建てられ、社叢の中で修行ということになる。

**墓林** 『日本書紀』允恭天皇五年の条に、反正天皇が没し埋葬まで遺体を安置してまつよう命を受けた玉田宿禰は、地震の起きた夜、様子を見に来た使者に酒宴をしていたことが発覚し、報告されることを恐れて使者を殺し、「武内宿禰の墓域(はかのうち)に逃げ隠れぬ」とある。これは墓林を意味する資料で、墓域が林となり隠れやすくなっていたのではないかと考えられる。墓林や社叢に逃げ込むというエピソードは非常に多い。武内宿禰の墓については、後の史料に「室破賀(むろはか)」という表現で出て来る。奈良県御所市に室(むろ)という地名があり、ここに墳丘が樹木に覆われた巨大な前方後円墳の室宮山古墳がある。この古墳を武内宿禰の墓という人もいる。また、『続日本紀』慶雲三年三月の条に、王公諸臣の山野占有を禁じているが、「氏々の祖の墓と百姓の宅の辺に、樹を栽えて林とすること、并せて周二三十許歩ならむは、禁の限に在らず」と記されている。これは墓の私有権を認めると理解してよい。

## 千葉県の社叢について - 植生学から見た特徴 -

講師 原 正利 (千葉県立中央博物館環境科学研究科長)  
コメンター 奥富 清 (東京農工大学名誉教授・社叢学会理事)

**はじめに** 地球スケールの植生帯区分から見ると、房総半島を含む関東地方は亜熱帯・暖温带常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の北東限に位置している。日本列島スケールで見ると、関東地方は西南日本から続く常緑広葉樹林域と北日本に広がる落葉広葉樹林域との推移帯にあたる。千葉県は標高が低い(最高点は愛宕山で海拔408m)、温度的には全域が常緑広葉樹林帯のシイ帯に属するが、常緑広葉樹林がまとまって分布するのは県南部の房総丘陵に限られ、県北部をおおう下総台地では、常緑広葉樹林は面的な広がりを失い、コナラやイヌシデなどの落葉広葉樹林とモザイク的な分布を示す。

千葉県の社叢のうち、自然性の高いものは天然記念物や自然環境保全地域などに指定されている。大半は、スダジイ林やタブノキ林などの常緑広葉樹林で、これは千葉県が常緑広葉樹林域に属していることを考えれば当然の結果である。一方、自然性の高い社叢に限定せず、地域内の社寺全般の樹木景観について調べると、針葉樹は少ないが落葉広葉樹が多く混交するという別の特徴が浮かび上がってくる。この傾向は下総台地で著しい。混交する落葉樹はケヤキ、ムクノキ、エノキが多い。これらの種は種子が風または鳥によって広範囲に散布され成長が早い。社叢の林縁部や、常緑広葉樹が枯死または伐採された部分に侵入、定着、成長すると考えられる。常緑広葉樹・落葉広葉樹混合型の社叢が多いのは、千葉県の植生地理学的位置をよく反映したものと見える。

千葉県内の社叢のうち、自然性の高い森や、植栽起源であっても十分に発達して郷土景観上、重要と考えられる森を、森の優占種に着目して1)スダジイ林、2)タブノキ林、3)カシ類林、4)クロマツ林、5)スギ林に区分した。以下に各型の分布や特徴、代表的な社叢について触れる。

**スダジイ林** スダジイの優占する社叢は県内全域に広く分布する。ただし、野田市、柏市など県の北西部ではやや稀になる。下総台地のスダジイ林はスダジイ-ヤブコウジ群集に分類され、房総丘陵のスダジイ林はスダジイ-ホソバカナワラビ群集に分類されるものが多い。最も代表的なものは銚子市猿田神社や袖ヶ浦市坂戸神社、市原市大福山(白鳥神社)などである。また、県南部安房地域のスダジイ林は、県内ではここだけに分布が限られる南方系の植物(ヤマモモ、オガタマノキ、バクチノキ、ヒメユズリハ、モクレイシ、ホ

ルトノキ、タイミンタチバナなど)が混じるのが特徴である。代表的な森は、館山市洲崎神社や千倉町高塚山などで見られる。

**タブノキ林** タブノキ林も県内に広く分布するが、スダジイ林に比べると海岸近くに多い。また、利根川や江戸川など大きな河川沿いに内陸部まで分布することがある。さらに局所的に空中湿度の高い場所では、丘陵地の山頂や稜線部沿いにも分布することがある。種組成的には、樹木としてヤブニッケイやヤブツバキ、エノキ、ムクノキ、シダ植物のイノデ類などを伴う。県南部ではフウトウカズラやハゼノキ、マルバグミなども多く混じる。代表的な社叢として銚子市渡海神社、松戸市浅間神社、神崎町神崎神社、長柄町武峰神社(通称権現森)、館山市鷹の島・沖ノ島などがあげられる。

**カシ類林** 千葉県の社叢で多いカシ類は、ウラジロガシ、アカガシ、シラカシである。このうちウラジロガシは房総丘陵に多く、スダジイ林内に多く混交することがある。君津市三石山の観音寺などで見られる。アカガシは房総丘陵のスダジイ林内の尾根筋にやや多く混交するほか、下総台地の一部の社叢(八千代市七百所神社など)にも多く見られる。シラカシは、下総台地北西部では最も普通なカシ類であるが、植栽や二次的に広がったものが多い。社叢としてシラカシ林を持つ社寺は比較的、少なく、下総町小御門神社の社叢(植栽起源)が代表的なものである。このほか、鋸南町岩井袋にある浅間神社の社叢や周辺にはウバメガシがかなり見られ、ところによっては群落状を呈している。種の分布北東限に近く貴重なものである。

**スギ林** 県内ではこの型の社叢を持つ神社は比較的、少ない。スギの巨木を主体とした鬱蒼とした社叢の代表的なものは天津小湊町清澄寺や佐原市香取神宮、東金市日吉神社で見られる。

**クロマツ林** クロマツ林はかつて千葉県の沿岸部で最も普通な森林であった。しかし、マツノザイセンチュウによる松枯れや海岸部の埋め立てや開発により、著しく減少してしまった。しかし、九十九里浜~銚子市に至る沿岸部や、市川市、船橋市、千葉市の沿岸部の神社の中には境内にクロマツ林を持つ神社がまだ見られる。銚子市川口神社、市川市の諏訪神社や春日神社、千葉市浅間神社とその隣接地などが代表的なものである。

## 多賀大社の社叢について

講師

中野 幸彦(多賀大社宮司)

講師

野間 直彦(滋賀県立大学講師)

コメンテーター

土屋 敦夫(滋賀県立大学教授・社叢学会理事)

公共工事は社叢を狙っているのか？

神社は何千年も続く祖先の息吹を頂戴し、次世代に受け継いでいく中継点にあたり、現状を守っていくことを使命として日々勤めている。古事記には、国土創生は神の為せる業であることが書かれてある。これが神道の基本理念であり、自然を大切にすることは神社の使命でもある。

多賀大社には神仏習合の長い時代があり、江戸時代中期に、境内の4社寺の僧侶が街道伝いに多賀神の信仰を広めて全国に広がった。御祭神はイザナギ神とイザナミ神である。日本書紀によれば、「木の神」は紀州に座す五十猛(イタケル)神で、全国に樹種を播いて森を作ったとあるが、多賀大社儀軌(1775)によれば、伊弉諾尊(イザナギ神)が当地に降り立つと一夜にして杉の森となったとある。多賀大社はイザナギ神が最後に移り住んだ「杉の社」で、イザナギ神が降臨した鈴鹿山系の杉坂山には「飛(富)の木」という杉の巨木があり、東方4キロ先には山を降りて一時休まれた奥宮(来栖(苦しい)の里)がある。西には天皇の病氣平癒のために飯を盛ったシャモジの残材を挿したら大きくなった飯盛木(イモロギ)というケヤキの大木があり、元寇の戦利品を埋めた際に植えられたという「舟塚の大杉」の後継木もある。枯れた大杉を伐採した切り株の年輪を調べると約800年で、元寇の時代に合っており、昔の伝承通りであった。

多賀大社の社叢は約2万坪の平地に森があって、山林と続いていることから管理が難しいと言われている。東西500m・奥行き200mの中央を小川が縦断している。近年は暴風雨などで杉の倒木が著しく、照葉樹と針葉樹の混交林化を進めているが、照葉樹は社殿を凌ぐ高さに育てるのが難しく、神々しさを醸し出すのに苦労している。

平成2年から14年の約10年間に全国の神社の所有地の処分が促進されている。多賀大社でも、神殿裏の社叢を三面張り河川で東西に貫く計画が持ち上がった。代替事業として職員住宅のある社有地を提供して開発を止めたが、次に国道306

号の拡幅計画では住宅地を避けるために神田の削減を余儀なくされた。社叢が公共事業の名の下に狙われているようだ。

神々しさと原風景を共有する社叢

近年の里山林は、除伐などの管理を行わないために、極相林に近づきつつあり、困った問題が起こっている。高木の下には照葉樹が育ち、暗い森になっており、林床に小さな植物が育たず、開けた所で採餌する鷹のような猛禽類が繁殖できず、獣が山から下りてきて田畑を荒らすことになる。

近隣の森は、獣害御三家といわれるサル・シカ・イノシシの害に困っているが、多賀大社の社叢は良く維持されている。杉の樹齢は300年位で揃っており、明るい場所でしか育たないために、森全体が明るくなった時に、社を再生するために植えたと考えられる。多賀大社の社叢には川との繋がりが多い植物が見られ、山地には自生するが平野部では珍しい、自然度の高い林でしか見られない植物が多い。アラカシの大木、シラカシの樹林、ケヤキ・エノキ・ムクノキの大木、ナラガシワの大木など、湖東平野の河辺林に近い植生が保たれている。ケヤキは山から川に沿って生えていて、一般に地下水脈に根が届いている場合に良く育つといわれている。今年は木の実が豊作で、ケヤキも沢山の実をつけている。

社叢の東側は杉が多く開けていて単調であるが、西側は昔の開墾前の姿を留めている。林床の草も豊富で、ワサビや山地に自生するが平地では珍しいミヤマカタバミが見られる。ヤブニッケイ・シロダモ・ツバキ・カラタチバナ(マンリョウの仲間)・サカキ・クサギ・クマノミズキといった照葉樹林に特有の垂高木も多い。マメツタ・イタビカズラ(イチジクの仲間)・テイカカズラなどの珍しい着生植物も豊富で、適度な湿り気ときれいな空気が確保されていることを示している。白花が珍しいミズヒキ・ハナタデ・ミヤマカタバミも。生憎の雨であったが、講演の後、キンモクセイの香りに包まれての楽しい観察会であった。

## 次回予告(第8回中部定例研究会)

日時：2006年3月11日(土) 13:30~16:00

場所：小國神社(静岡県周智郡森町一宮 3956-1、Tel.0538(89)7302)

テーマ・講師：小國神社の社叢について(仮) 打田 文博(小國神社宮司)ほか

bookbookbookbookbookbookbookbookbookbookbook

## 書籍紹介

bookbookbookbookbookbookbookbookbookbookbook

### 『日本人はどのように国土をつくったか』

～地文学事始～

上田 篤・中村良夫・樋口忠彦 / 編

「地文」は「土地の神さま」であり、地文学は「土地の神さまを調べる学問」ではないかという発想から、「国づくりと文化を考える新しい学問」が地文学であると編者は語る。本書は、奈良・京都・津山などの盆地、筑紫・関東・濃尾などの平野、東山道などの街道がいかにつくられたかを、歴史学・人類学・国文学・建築学・土壌学などの立場から論述している。例えば「盆地と水脈がつくった庭園都市～京都盆地はいかにつくられたか」「山を結ぶ駅路～東山道はいかにつくられたか」「海と川とクリーク～筑紫平野はいかにつくられたか」など 12 篇を収録。

学芸出版社・定価 3,000 円(税別)

### 事務局から

トップページで紹介しました九州国立博物館において、11月19日・20日の両日、アジア史学会の公開講座が開催されます。アジア史学会は当社叢学会の上田正昭理事長が会長をされており、初日の19日は「日本古代国家と東アジア」と題して基調講演を、翌20日のシンポジウムでは座長を務められます。新国立博物館の見学も兼ねてご参加下さい。会費未納の方が多数おられます。未納者には会費振込み用紙を同封させていただきました。皆さまの会費のみで運営しております当学会

としましては、活動に支障をきたしますので、何卒よろしくお願いたします。

### 編集後記

阪神タイガースが優勝した。20年に1回のお祭り騒ぎだと思っていたら、なんと2年しか経ってない！ ちょっとはしたくないよ。でも日本シリーズでは...。そうなのよ、これがタイガースなのよと思ってしまう。だって、相手は30年ぶりでしょ、惻隱の情ってのも必要じゃない(あ、ちょっとイヤミ!)。何を隠そう！ U理事長もI事務局長も阪神ファン。I事務局長なんて、「プレーオフのTV中継がないんだ。日本シリーズのために見ときたいんだけどね」だって。おいおい、アンタは監督かい。「負けても負けても応援するからそれに甘えて強くなれないんだ！」なんてこと言われてた阪神ファン、「ああ、やっぱりなあ」を20年間、言い続けられるシンボー強い人たちなんです。

(藤岡 郁)

### 原稿募集!

『社叢学研究』(第4号)への投稿: 従来どおり論文、研究ノート、資料紹介や調査報告(各400字詰原稿用紙40枚以内)のほかに、新たに会員通信「鎮守の森の活動報告」を募集します(下記参照)。今年度の投稿締切りは、いずれも11月30日(水)必着。

「鎮守の森の活動報告」: 祭り、音楽会、問題点など。B5判1200字(市販のもの<コクヨ>を使用)。横書き。手書き、ワープロ、イラスト、写真入り、いずれも可。

### 次回予告(第18回関東定例研究会)

日時: 2005年12月17日(土) 14:00~17:00

場所: 國學院大学・渋谷キャンパス 120周年記念2号館2階 2203教室

(東京都渋谷区東4-10-28)

テーマ: 諏訪大社の祭りに関わる木・森の社会的・宗教的位置づけ

講師: 島田 潔(國學院大学日本文化研究所兼任講師)

コメンタ: 園田 稔(京都大学名誉教授・社叢学会副理事長)

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区蛸薬師通堺町西入雁金町373番地

みよいビル303号 TEL075-212-2973 FAX075-212-2916

URL <http://www2.odn.ne.jp/shasou/> E-Mail [shasou@ams.odn.ne.jp](mailto:shasou@ams.odn.ne.jp)

社叢学会関東支部 〒171-0021 豊島区西池袋2-36-1 ソフトタウン池袋1101

TEL03-5950-6507 FAX03-5950-5184 E-Mail [shasou@macrovision.co.jp](mailto:shasou@macrovision.co.jp)